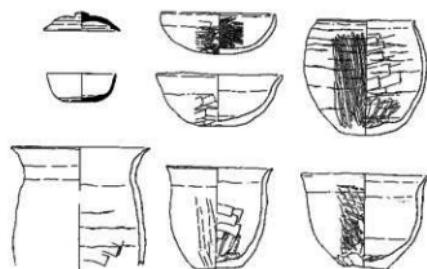


平成12年度

東九州自動車道(都農～西都間)関係  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書 I



2001

宮崎県埋蔵文化財センター

## 序

宮崎県教育委員会では、日本道路公団九州支社の依頼により、平成11年度から東九州自動車道の西都～都農間建設工事予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しております。

今年度は、17遺跡についての確認調査と、8遺跡の本調査を実施し、大きな成果を挙げることができました。

出土した遺物の中には、瀬戸内方面との交流を物語るものがあり、現代のハイウェーが建設されようとしている今回の調査地は、まさに古代においても交易の結節点であったことが窺えます。

また、南九州特有の地下式横穴墓や古墳の周溝が検出されており、往時の墓制を知る上で、重要な資料を得ることができました。

これらの成果についてまとめた本書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるための一助となり、学校教育や生涯学習の場で広く活用されますことを期待します。

最後になりましたが、発掘調査に際しましてご協力いただきました関係各機関や地元の方方に、厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 矢野 剛

## 例　　言

- 1 本書は、平成12年度に宮崎県教育委員会が日本道路公団九州支社の依頼を受けて実施した、東九州自動車道（都農～西都間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 本書に使用した遺跡位置図は、国土地理院発行の5万分の1地形図を基に作成した。各遺跡の周辺地形図は、日本道路公団九州支社宮崎工事事務所から提供を受けた地形図を基に作成した。
- 3 本書中における方位の北は、一部滋北（M・N）と明記したものを除き座標北を示す。
- 4 本書の執筆は、各担当・調査員が分担して行ない、文責は目次に明記した。編集は調査第一課主査 吉本正典が行なった。

## 目　　次

第Ⅰ章　序　説	1
第1節　調査の経緯と調査組織	(吉　本) 1
第2節　調査地の位置	(吉　本) 2
第3節　確認調査	(和　田) 4
第Ⅱ章　調査成果	5
第1節　概要	(吉　本) 5
第2節　下耳切第3遺跡	(今塩屋) 6
第3節　北牛牧第5遺跡	(草　蓮) 10
第4節　牧内第1遺跡	(松　田) 14
第5節　音明寺第1遺跡	(戸　高) 16
第6節　音明寺第2遺跡	(山　口) 20
第7節　東畦原第3遺跡	(福　松) 24
第8節　西畦原第1遺跡	(南中道) 26
第9節　藤山第2遺跡	(戌　亥) 30

# 第Ⅰ章 序 説

## 第1節 調査の経緯と調査組織

宮崎県教育委員会では、今年度から日本道路公団の委託を受け、東九州自動車道（西都～都農間）の建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施している。

今年度は平成12年4月1日付けで、同公団九州支社と宮崎県文化課との間で契約が締結され、同日より平成13年3月31までの期間、宮崎県埋蔵文化財センターが調査を実施することとなった。

年度の上半期は主に確認調査を実施し、9月より下耳切第3遺跡、音明寺第1遺跡、音明寺第2遺跡、藤山第2遺跡の、11月より北牛牧第5遺跡、牧内第1遺跡、東畦原第3遺跡、西畦原第1遺跡の本調査に取りかかっている。

調査組織は以下の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 徂山竹義  
教育次長 福永孝義  
教育次長 岩切正憲  
文化課長 黒岩正博  
埋蔵文化財係長 石川悦雄  
主査 飯田博之

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野剛  
副所長 菊地茂仁  
副所長 岩永哲夫  
調査第一課長 面高哲郎  
調査第二係長 長津宗重  
総務係長 亀井維子  
主任主事 上野広宣  
主事 平田ユミ子

(調整担当) 吉本正典 和田理啓 (発注関係) 下西武志 (確認調査) 田中光 藤木聰

(調査担当) [下耳切第3] 永田和久 都成量 今塙屋毅行 [北牛牧第5] 草薙良雄 倉瀬靖浩

大村公美恵 栗山正明 [音明寺第1] 戸高幸作 渡部誠一郎 外山宏幸

[音明寺第2] 山口昇 永野高行 [牧内第1] 松田清孝 山下健一 崎田一郎

[東畦原第3] 横田通久 福松東一 阿部直人 [西畦原第1] 南中道隆 新町芳伸

[藤山第2] 戊亥浩志 尾園賢二

(調査員) 工藤基志 高木祐志 松尾有年 金丸史絵 丹俊詞 秋成雅博 東哲志

## 第2節 調査地の位置

確認調査および本調査を実施した地点と遺跡名を、図1-1に示している。

調査対象地は、宮崎平野の周縁部にあたり、標高100m前後の段丘が卓越する「台地地帯」となっている。

この一帯での考古学的調査は、さほど多いとは言えないが、宮崎県域の中では遺跡の密度の高い地域であり、各時代の基準となる資料がいくつか得られている。

旧石器時代に関しては、新富町内での踏査の結果採集された遺物の報告例がある<sup>1)</sup>。

高鍋町の大戸ノ口第2遺跡では、縄文時代早期の集石遺構が多数検出され、縄文時代中期の船元式系土器の比較的まとまった個体が出土している<sup>2)</sup>。

弥生時代前期～中期前半の集落の一部が、高鍋町持田中尾遺跡<sup>3)</sup>や新富町鎧遺跡<sup>4)</sup>で確認された。両遺跡ともに環濠の一部が検出されており、該期の緊張関係を示す資料とされる。

また弥生時代中期末から「花弁状住居」等と称される特異な形状の竪穴住居が出現するが、その初現期のもので、典型例とされる資料が新富町新田原遺跡で確認された<sup>5)</sup>。また同じ新富町の八幡上遺跡<sup>6)</sup>や高鍋町の牛牧原遺跡<sup>7)</sup>でもその種の遺構が確認されている。

新富町川床遺跡では、弥生時代土壙墓や円形・方形周溝墓が多数検出され多量の土器、鉄器が出土している。該期の墓制を知る上で重要な資料である<sup>8)</sup>。

古墳時代の当地には、国指定史跡新田原古墳群や川南古墳群など多数の古墳が築造される。それらの内容は、盗掘による資料のみで、判然としない部分が多くあったが、近年の新富町教育委員会による古墳群整備のための発掘調査により、百足塚古墳（前方後円墳）における埴輪祭祀の状況など、徐々に内容が知られるようになった<sup>9)</sup>。また該期の集落跡は、新富町上蘭遺跡<sup>10)</sup>や銀代ヶ迫遺跡、藤掛遺跡で確認されている。上蘭遺跡では、古代の掘立柱建物跡も検出されており、継続して遺跡が営まれていたことが窺える。

また古代律令期の官衙跡等は、これから研究分野であるが、古代官道が宮崎平野の周縁部を通っていたと推定されており、その解明が待たれる。

### (文献)

- 1) 茂山 譲 大野寅夫「児湯郡下の旧石器」「宮崎考古」3 宮崎考古学会 1977
- 2) 高鍋町教育委員会「大戸ノ口第2遺跡」高鍋町埋文報5 1991
- 3) タ 「持田中尾遺跡」概要報告書 1982
- 4) 新富町教育委員会「鎧遺跡・藤掛遺跡」新富町埋文報2 1982
- 5) タ 「新田原遺跡」新富町埋文報4 1983
- 6) タ 「八幡上遺跡・七又木遺跡・銀代ヶ迫遺跡」新富町埋文報13 1992
- 7) 高鍋町教育委員会「中尾・牛牧地区遺跡」高鍋町埋文報7 1995
- 8) 新富町教育委員会「川床遺跡」新富町埋文報5 1986
- 9) タ 「新田原古墳群47号墳他」新富町埋文報17 1999など
- 10) タ 「上蘭遺跡E地区 他」 1995など

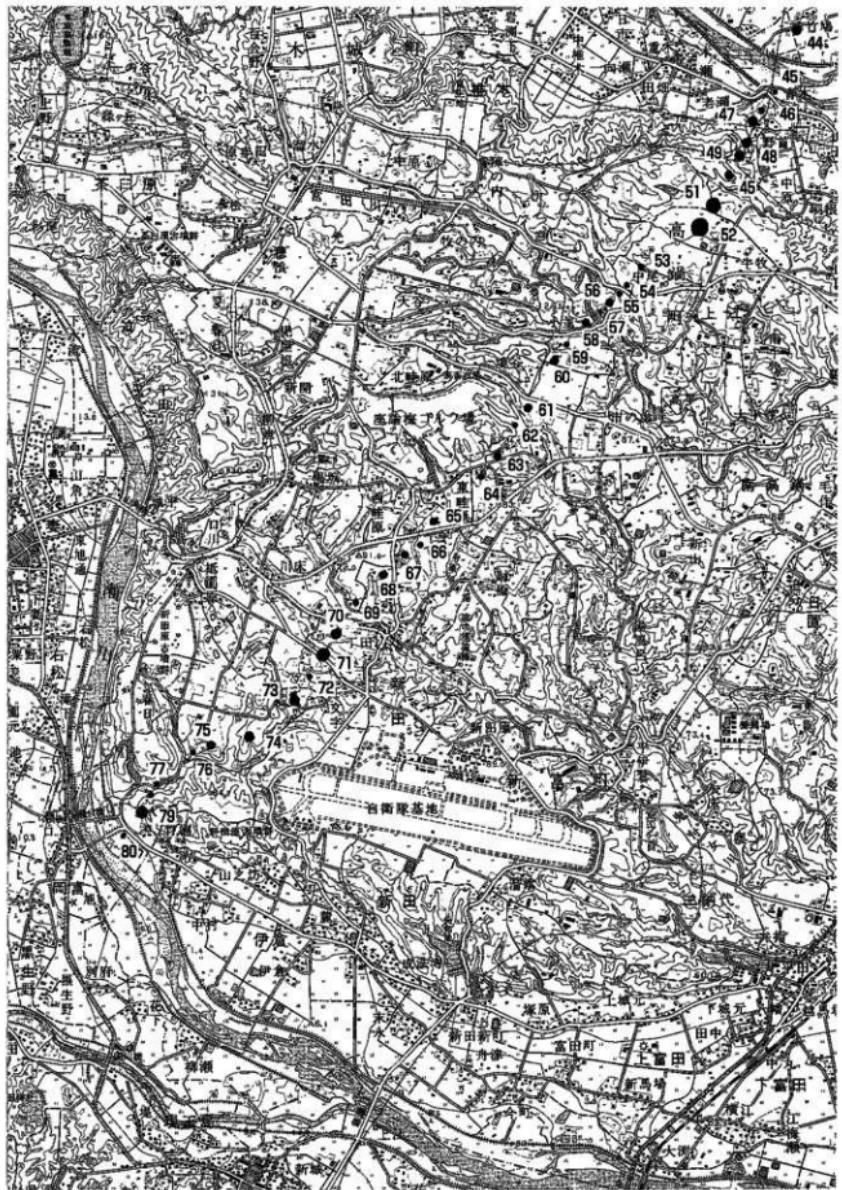


図1-1 位置の位置 (1/50000)

### 第3節 確認調査

確認調査は、平成11年度から継続して実施している。各々については、下表を参照されたい。なお、表中の遺跡番号は、図1-1の番号と一致する。

表1 東九州自動車道（高鍋～西都）遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	確認調査の期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査担当者	本調査の有無	備考
44	竹鳥	高鍋町大字上江字竹鳥					
45	青木	高鍋町大字上江字青木					
46	野首第1	高鍋町大字上江字野首	12. 8.7～ 8.21	18.5	福松・阿部・外山・松尾	○	
47	野首第2	高鍋町大字上江字野首	12. 6.19～ 6.26 12. 8.21～ 8.22 12. 9.28～10.13	150	外山・阿部・福松・今垣屋・松尾	○	
48	南中原第1	高鍋町大字上江字南中原					
49	南中原第2	高鍋町大字上江字南中原					
50	老齋板上	高鍋町大字上江字老齋					
51	下耳切第3	高鍋町大字上江字下耳切	12. 6.19～ 6.28	210	南中道・大村・新町・水田・丹	○	概要については本文参照
52	北牛牧第5	高鍋町大字上江字牛牧	12. 6.15～12. 6.28 12.10. 2～10.11	200	草薙・金前・山下・工藤	○	概要については本文参照
53	唐木戸第1	高鍋町大字上江字唐木戸					
54	唐木戸第2	高鍋町大字上江字唐木戸					
55	唐木戸第3	高鍋町大字上江字唐木戸	12. 6.19～ 6.22	25	松田・永野・都城・山口・秋成	○	
56	唐木戸第4	高鍋町大字上江字唐木戸	12. 6.19～ 6.27	88	戸高・渡部・横田・藤木・丸九	○	旧石器時代の集石
57	唐木戸第5	高鍋町大字上江字唐木戸					
58	小並第1	高鍋町大字上江字小並					
59	小並第2	高鍋町大字上江字小並					
60	牧内第1	高鍋町大字上江字牧内	12. 8. 7～ 8.11 12.10. 2～10.16	296	松田・山下・栗山	○	概要については本文参照
61	牧内第2	高鍋町大字上江字牧内	12. 8. 7～ 8.11	56	山口・松田・水野・大村	○	
62	音明寺第1	新富町大字新田字音明寺	12. 4.13～ 4.18 12. 6.5～ 6.14	150	和田・戸高・渡部・横田・藤木・丸九	○	概要については本文参照
63	音明寺第2	新富町大字新田字音明寺	12. 6. 5～ 6.14 12. 7.24～ 8.1	200	松田・永野・都城・山口・秋成	○	概要については本文参照
64	東畦原第1	新富町大字新田字東畦原					
65	東畦原第2	新富町大字新田字東畦原					
66	東畦原第3	新富町大字新田字東畦原	12. 7.24～ 8.4 12. 9.20～ 9.29	200	戸高・渡部・藤木・横田・松尾・丸九	○	概要については本文参照
67	西畦原第1	新富町大字新田字西畦原	12. 6. 5～ 6.13 12. 7.24～ 8.3 12. 9.19～ 9.29	250	南中道・大村・新町・水田・丹	○	概要については本文参照
68	西畦原第2	新富町大字新田字西畦原	12. 6. 5～ 6.8 12. 9.20～10. 5	140	草薙・福松・山下・栗山・大村・工藤	○	
69	上新開	新富町大字新田字上新開					
70	一丁田	新富町大字新田字一丁田	12. 7.24～ 8. 3	44	福松・阿部・外山・松尾	○	
71	勘大寺	新富町大字新田字勘大寺	12. 3.21～ 3.29 12. 4.13～ 4.18 12. 7.19～ 7.28	370	田中・草薙・山下・倉賀・松田・工藤	×	
72	永幸田第1	新富町大字新田字永幸田	12. 9.30～10. 6	90	山下・松田	×	
73	永幸田第2	新富町大字新田字永幸田	12. 3.23～ 3.29 12. 6. 5～ 6.12 12. 8. 1～ 8. 4	550	戌亥・草薙・山下・倉賀・松田・工藤	×	
74	尾小原	新富町大字新田字尾小原					
75	向原第1	新富町大字新田字向原	12. 3.21～ 3.28 12. 9.14～ 9.29	150	戸高・草薙・倉賀	○	
76	向原第2	新富町大字新田字向原					
77	巖山第1	新富町大字新田字巖山					
78	巖山第2	新富町大字新田字巖山	12. 7.24～ 8. 4	60	戌亥・尾瀬・下西・高木	○	概要については本文参照
79	宮ノ東	西都市大字岡富字宮ノ東	12. 1.24～ 3.29	300	草薙	○	石塔群・須恵器・古鏡等が出土
80	宮ノ前	西都市大字岡富字宮ノ前	12. 9.25～ 9.27	12	阿部・福松	×	

## 第Ⅱ章 調査成果

### 第1節 概要

#### 1 調査の方法

今年度本調査を実施した8遺跡については、いずれも確認調査で捉えられた文化層の直上まで、機械力を使用して無遺物層の排土を行ない、その後、遺物包含層の掘り下げや遺構精査を行なっている。その結果、次節で触れるように、古くは旧石器時代から中世に至る各時代の遺構が確認され、多種にわたる遺物が出土している。

なお、調査の際に、地形や調査の進行上の都合（廃土処理など）に応じて、「A区」などの区割りを行っているところがある。

また記録類のうち、平面位置については国土座標第Ⅱ系に基づいて設置された杭に掲っている。検出遺構については、種別ごとに以下の通りの略称を用いる。

竪穴（住居跡）…S A	掘立柱建物…A B	土坑…S C
土壙（墓）…S D	溝状遺構…S E	道路状遺構…S G
地下式横穴…S T		

番号は検出順に付していく。

なお、2遺跡を除き、この概要報告の作成時点においても調査は日々進行中であり、5遺跡については平成13年度以降に継続となる。また、遺物の整理も本格的な作業はこれからという状況下にある。従って、本書の内容は現時点における観察所見であることを強調しておきたい。

#### 2 層序

各遺跡で確認された層については、遺跡ごとにI～の番号を付しており、全体としての基本層序を整理する作業は行なっていない。これは調査箇所が比較的広範囲にわたるため、地点により層の堆積状況に差があること、および鍵層となる火山灰についても遺存状況が異なること等による。ただし、表土下の比較的浅い位置にアカホヤ火山灰層（K-Ah・以下アカホヤ層と略記する）が、その下位に霧島山系起源の小林軽石を含む層が断列化しながら認められ、さらにその下位には始良丹沢火山灰（A T）、最深部近くにはアワオコシスコリア、イワオコシスコリア（I W）が見られるなど、基本的な層順は各遺跡に共通することが確認されている。

アカホヤ層が遺存する場合は、まずその上面で遺構の精査を行い、そこで文化層が認められなかつた場合、より下位の層の掘り下げを行うという手順が、多くの遺跡でとられている。

## 第2節 下耳切第3遺跡（児湯郡高岡町大字上江字下耳切）

### 1 遺跡の立地

下耳切第3遺跡は、小丸川右岸に広がる三財原面上の牛牧台地（標高約90m）北東の縁辺に位置する。調査地は東側から続く平坦地と西側の丘陵に挟まれた谷地形にあり、北側を開析谷に接し、南側にかけては緩やかな斜面が広がる。付近には牛牧古墳群（前方後円墳1基、円墳13基）が分布する。

調査地周辺には、北に約1km離れた小丸川の低位段丘上に山王古墳群が、南へ約2kmに牛牧原遺跡があり、旧石器時代のナイフ形石器やスクレイパー等が出土した。なお、北牛牧第5遺跡は調査区のすぐ南側に隣接する。（第2図）



図2-1 周辺地形図

### 2 遺跡の概要

現在調査継続中で、これまでに検出した遺構は、縄文・古墳～古代の集落と墳墓群である。

基本層序は図2-2のとおりでI層（表土）から第IX層（イワオコシスコリア層）まで確認できたが、調査区大半がアカホヤ層（III層）まで開墾による削平を受け、牛蒡栽培によるトレンチャーハー跡も幾条もみられ、場所によってはV層まで掘り込まれていた。

調査区内には、縄文～古墳時代の遺物包含層（II層）が辛うじて遺存していたが、結果的に縄文・古墳～古代の遺構面検出はIII層上面となつた。現在このIII層上面を調査中で、今後VI層下の旧石器時代包含層の調査を予定している。

ここでは、本遺跡の概要について時代別に触れていくことにする。

#### (1) 縄文時代中期

遺構は円形の竪穴住居を2軒を確認した。2軒とも竪穴の周囲にはピット列が巡る。住居床面より春日式の深鉢が、埋土及び床面からは剥片、石錐、石錐、切目石錐、敲石等が出土した。遺物包含層及び表土中からは多量の春日式土器片、石匙、打製石斧、切目石錐、敲石、磨石等が出土している。出土比率では石器量がはるかに多く、特に切目石錐・敲石がその中心を占める。

I	表土
II	黒色土
III	アカホヤ火山灰層
IV	黒色土
V	小林輕石を含む暗褐色土
VI	暗褐色土
VII	褐色土
VIII	始良丹沢火山灰(AT層)
IX	黒褐色土
X	アワオコシスコリア層
XI	アワオコシスコリア層

図2-2 基本土層図

(2) 古墳時代～古代  
遺構は竪穴住居、掘立柱建物、土坑、古墳、  
地下式横穴墓及び土壙  
墓等を確認した。

竪穴住居は現段階で  
49基検出し、その多く  
の住居はカマドを付設  
する。住居内にカマド  
と「埋甕」(土器埋設  
炉)が並存する例も少  
なくない。住居の大  
きさは一辺の長さから大  
型(6～7m)、中型  
(5m)、小型(4m以  
下)に分けられる。最  
終的に全体で60～70基  
の規模になる見込みで  
ある。この竪穴住居群  
に併行または後続する  
形で掘立柱建物群も展

開し、一部は柵列も確認した。こういった竪穴住居や掘立柱建物群は調査区北半部で東西方向へ広  
がっており、詳細な検討を経ていないが、7～8世紀頃の集落と考えられる。

古墳は既知の牛牧1号墳のほかに、新たに埋没古墳を1基確認した。ここでは仮15号墳と呼称す  
る。この2基とも円墳で共に周溝が二重に巡り、牛牧1号墳は墳丘径約20m、周溝を含めた直径は  
約40mとなる。なお、仮15号墳は墳丘径約12m、周溝を含めた径約15mと推定される。これら古墳  
の主体部や築造時期については、確認中である。

地下式横穴墓は現在未掘を含めて9基確認している。これらは牛牧1号墳の周溝内に6基、仮15  
号墳にも1基、牛牧1号・仮15号墳との間に2基位置する。古墳周溝内の地下式横穴墓は、殆どが  
墳丘外に玄室を向ける形で周溝の立ち上がりを掘り込む。古墳周溝埋土の状況から、古墳築造後、  
ある程度周溝が埋没した時点で地下式横穴墓を築造したと考えられる。

これらの地下式横穴墓は玄室平面が楕円形の平入り型で、竪坑は方形のものと墓道のように主軸  
方向に長く伸びた形状がある。閉塞には木板、土塊、石を用い、玄室床面には河原石を敷き詰め砾  
床とするものもある。出土遺物は須恵器・土師器・馬具・鉄鎌・刀子・耳環等があり、時期は7世  
紀前半～中頃と考えられる。土層や遺物から追葬の痕跡も確認している。

また、9号地下式横穴墓の東隣にある土壙墓からは、須恵器・刀子・切子玉・耳環が出土し、須

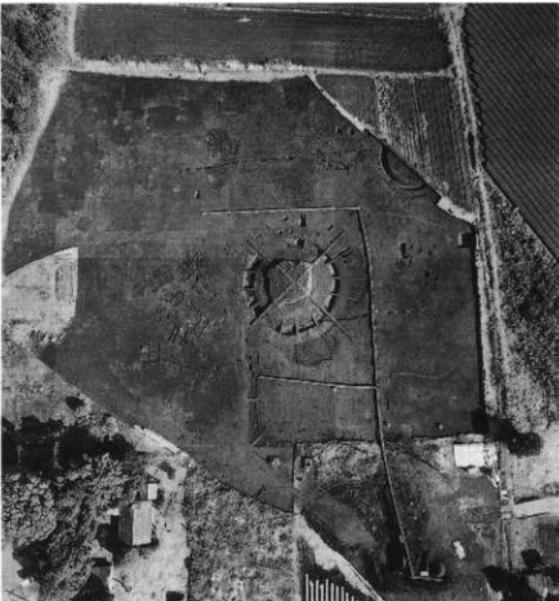


写真2-1 調査区全景

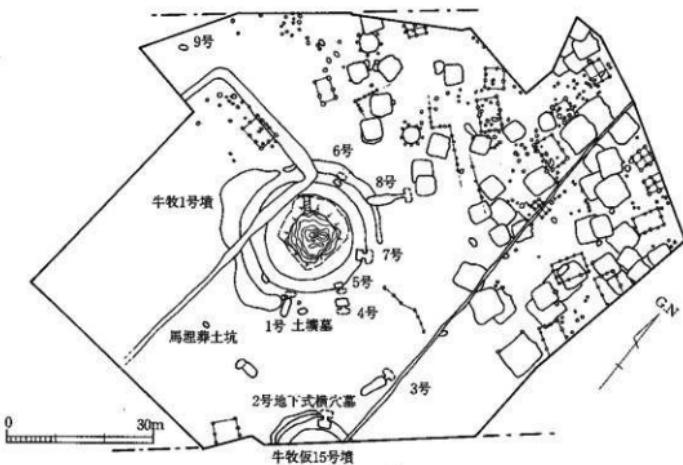


図2-3 遺構分布図 (1/1,000)

恵器から時期は7世紀前半（隼上りⅡ段階）である。さらに牛牧1号墳の南側では馬埋葬土坑を1基検出し、馬具の一部を出土した。

#### (3) その他の時代

終戦後に始まった開拓に伴う溝及び建物及び井戸跡を確認している。なお、発掘調査予定区内では確認調査により道路状遺構（アカホヤ火山灰降灰以後）を検出した。

#### (4) 小結

本遺跡では古墳時代～古代の初め頃の集落と墳墓群がまとまって検出された。両者の距離は幅10m内外とかなり近接した状態でその時期も近いと考えられる。古墳時代から律令国家体制への転換期における、宮崎県下の集落と墳墓群との関係やそれらの構造を考える上で重要な遺跡と考えられる。地下式横穴墓は、一つ瀬川を越えた新富町蔵藪地下式横穴墓群よりも北側で、小丸川を望む位置での確認となった。また古墳の周溝を掘り込んで築造するという、円墳と地下式横穴墓の重なり合いは類例がそれほど多くなく注目される。時期的には地下式横穴墓が終焉を迎える頃の様相を示す事例と思われる。

これからも、山積する課題を少しでも解決すべく本遺跡の全容解明に努めたい。

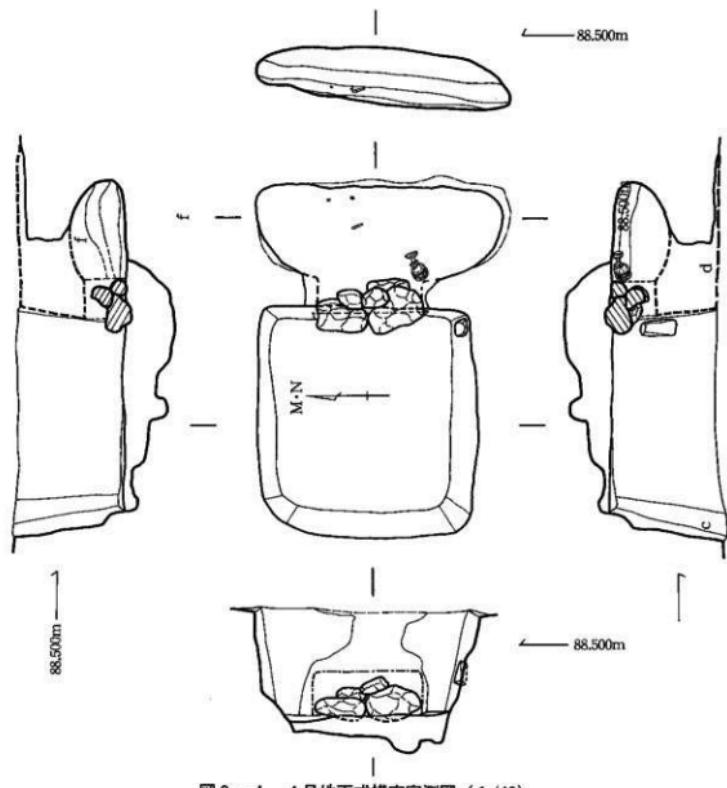


図2-4 4号地下式横穴実測図（1/40）

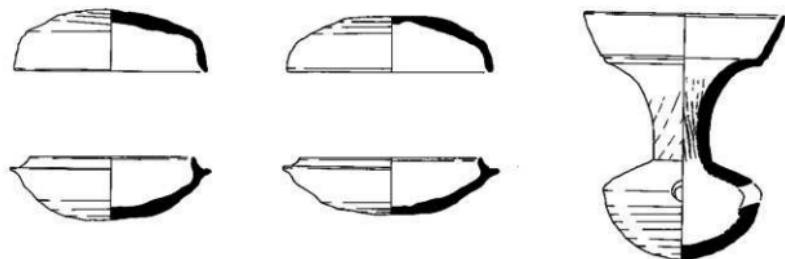


図2-5 4号地下式横穴墓出土土器実測図（1/3）

### 第3節 北牛牧第5遺跡

#### 1 遺跡の立地

本遺跡のある牛牧地区は、高鍋町内西方小丸川右岸の牛牧台地上にある。東側からの平坦地と西側の丘陵地に挟まれた扇状地の東端にあたり、北から南へと緩やかに傾斜している。周辺には、現在調査中の下耳切第3遺跡を始め、牛牧原遺跡等数多くの遺跡が点在している。

#### 2 調査の概要

平成12年10月30日より、遺跡中央部（対象面積9,000m<sup>2</sup>）について調査を始めた。

基本層序は図3-2の通りである。

アカホヤ上下の黒色土が調査区内南部で確認された。また、アカホヤ層については、畑地造成等により削平を受けている箇所が全区で見られた。また、火山灰や土中の鉄分が酸化して赤く変色している（Ⅲ・V層面一部）こと、流れ込みと思われる二次堆積ATが非常に厚く堆積している（南東部）こと、畑地造成前は、調査地南部は、水が溜まることが多かった（地元の方の話）ということからも分かるように、旧地形は周辺よりも一段低かったことが伺える。

遺物包含層は、今までにⅡ・V・VI・Ⅷ層で確認されている。本遺跡の大半は、直前まで畑作地として利用されており、トレントチャーフ痕が調査区内北部でⅨ層、中央部でV層まで確認できた。

調査にあたっては、事前の確認調査の結果（Ⅲ層上面で溝状遺構、VI層上面でピット）に基づき、第一段階として、11月～1月にかけて、アカホヤ層上面で遺構・遺物の検出を行った。



図3-1 周辺地形図 (1/1600)

I	表 土
II	黒色土 クロボク 軟質
III	アカホヤ火山灰層
IV	黒色土 やや硬質
V	黒褐色土 硬質で、橙色粒を含む
VI	褐色土 橙色ボラ、暗褐色色ブロック、白色砂粒を含む
VII	褐色土 軟質で、さらさらしている
VIII	始良・丹沢火山灰層 (AT)
IX	暗褐色土 硬質で、ブロック状に崩れる 暗褐色→明褐色に変移
X	褐色土 砂層、礫、黄褐色粒をブロック状に含む
XI	アワコシスコリア
XII	明褐色土 粘性強く、礫、橙黄色粒を多く含む イワコシ
XIII	灰白色土 灰白色ローム調 粘性が非常に強く、礫を含む
XIV	

図3-2 基本土層図



写真3-1 遺跡近景

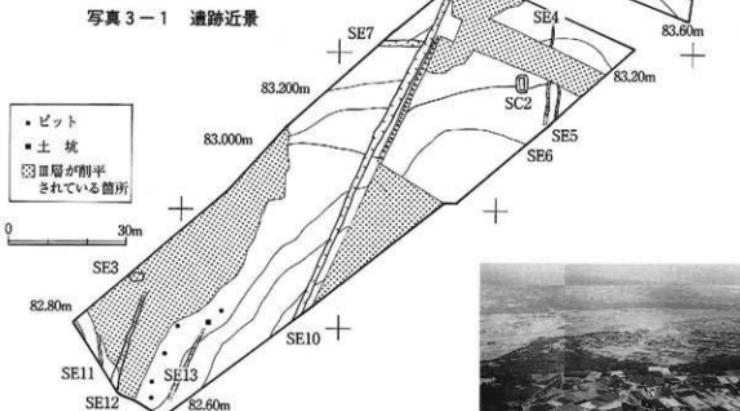


図3-3 III層上面遺構分布図 (1/1250)



写真3-2 遺跡全景

### (1) 溝状遺構

S E 1は、北部を南北に約40mにわたって延び、更に北に延びるとともに、南では、S E 4・5につながるものと思われる。掘込み面は確認できなかったが、下端が約20cmしかないこと、小さな蛇行を繰り返していること、埋土の最下部に砂礫層があることなどから、流路であったと思われる。なお、溝の床面より鉄器、埋土中より縄文土器（晩期）、同じく埋土中よりスクレイパーが出土した。

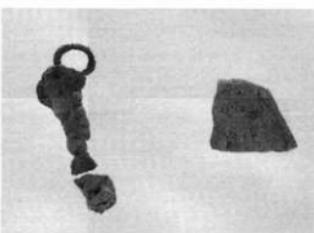


写真3-3 SE 1出土遺物

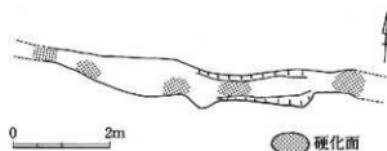


図3-4 SE14硬化面

方が若干急であったが、埋土から一つの溝と判断した。埋土中より、土師器口縁部片（中世）、須恵器片、陶器片（薩摩焼底部：近世）が出土した。

SE7は、中央部を東西に延びており、東側は削平により無くなっていた。アカホヤ上層面から掘り込まれていることが、段掘りされていること、この一体のV層面が固結しており、この面を溝の底部としたことを土層から確認した。埋土の最下部層は砂礫層であり、流路として使用されたのではないかと思われる。

SE12は、南端部を南北に延びていた。埋土の土層より、三期にわたって造られていることが確認できた。I期目は、検土面での幅約2mの溝状に掘り込まれていた。やはり最下部層に砂粒を含むことから、流路に伴うものであったと考えられる。またII期目については、厚さ約7cmの非常に固い硬化面が見られることから、前述の溝に張り土をし、道として使用した可能性がある。硬化面中より土師器口縁部が出土した。



写真3-4 SE7（東より）



写真3-5 SE12（南より）

## (2) 土坑

SC2は、(検出したアカホヤ層面で)上端約5m×3m、下端約1.5m×2mの方形をしており、VI層面まで掘り込まれ床面はやや硬化していた。埋土は4層から成る。高原スコリアが埋土II層で確認された。

SE14は、SE1に直行する形で東西に延びていた。両端は削平により減失していたが、硬化面がわずかに残っていた。また切り合い部分の土層断面より、SE1より古いことが分かった。

SE10は、調査区内をほぼ南北に、約80mにわたって延びていた。立ち上がりが東側の



図3-5 SE12土層断面図

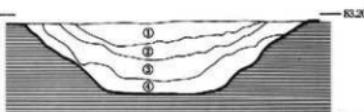


図3-6 SC2土層断面図（1/50）

SC 3は、SC 2をやや小型化していたが、形状はほぼ同じであった。床面はさほど硬化していなかった。埋土は5層から成るが、やはり埋土④層で高原スコリアが確認された。いずれも遺物を伴わず、時期・使途ともに不明であるが、高原スコリアが降下した13世紀以前の遺構であることは確かである。



写真3-6 SC2 (南西より)



写真3-7 SC3 (西より)

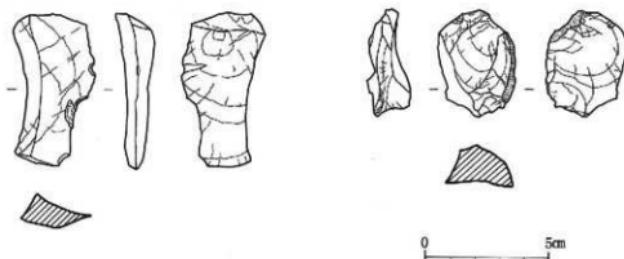


図3-7 VI層出土石器実測図 (1/2)

### 3 小結

以上述べてきたように、溝状の遺構が多いことが特筆できる。しかし、これらの遺構の時期を確定する要素が少なく、現段階では時期の特定は困難である。

一方、先行トレンチを各区に入れたが、V層面でピット2基、石礫4点（黒曜石製3、チャート製1）、VI・VII層面で剥片を検出した。アカホヤ層上面終了後は、V層面から調査していく予定である。

## 第4節 牧内第1遺跡（高鍋町大字上江字牧内）

### 1 遺跡の立地

本遺跡は、高鍋町の南西部に所在し標高約95mで、新富町祇園原から畠原・三財原・追分、高鍋町市の山・中尾・牛牧にかけて広がる三財原段丘面の中西端に位置する。西方約70mには上位の茶臼原段丘面の段丘崖が迫っており、南方の牧内第2遺跡に隣接している。湯風呂川を隔てた本遺跡南西方約700mには音明寺第1遺跡が位置している。

### 2 調査の概要

本年度は本遺跡南西部のC区を中心に調査を行った。

#### (1) 基本層序

調査地の基本層序は図4-2の通りで、I層からXII層まで確認された。調査区の一部は現代の耕作によって面層（小林軽石を含む褐色ローム）まで搅乱を受けていた。

#### (2) 遺構

遺構は、住居の柱穴と思われるピット群を、VI層とVII層でそれぞれ1基検出した。VI層で検出したピットは直径約6mの円形に配列し、VII層で検出されたピットは直径約2mの円形に配列する。遺構に伴う遺物は現在のところ出土していない。

#### (3) 遺物

遺物は旧石器時代のものと思われるものがほとんどで、現在のところ土器は全く出土していない。主な遺物はVI層から細石刃・石核・剥片等が、VII層からナイフ形石器・細石刃・石核・剥片等が、VIII層からはナイフ形石器・剥片等が出土している。細石刃は2点出土したがいずれも黒曜石製であった。ナイフ形石器の中には横長剥片を利用した一側縁加工と思われるもの（欠損）が確認された。VII層で出土した石核はホルンフェルス製で960gと大形であった。

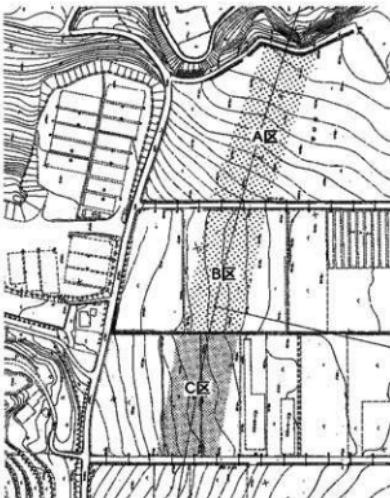


図4-1 周辺地形図

I	擾乱（耕作土を含む）
II	黒ボク
III	アカヤ火山灰層
IV	アカヤ火山灰層下部 5mm以下のバミス・火山豆石を含む
V	黒褐色ローム
VI	暗褐色ローム
VII	小林軽石を含む褐色ローム バミス少量
VIII	小林軽石を含む褐色ローム バミス多量
IX	暗褐色ローム 粘性あり
X	始良Tn火山灰 (AT)
XI	暗褐色ローム 白斑含む
XII	褐色ローム 下部にスコリア散在
XIII	アワオコシスコリア
XIV	明黄褐色ローム スコリア・バミス散在
XV	イワオコシ (IW)

図4-2 基本土層図

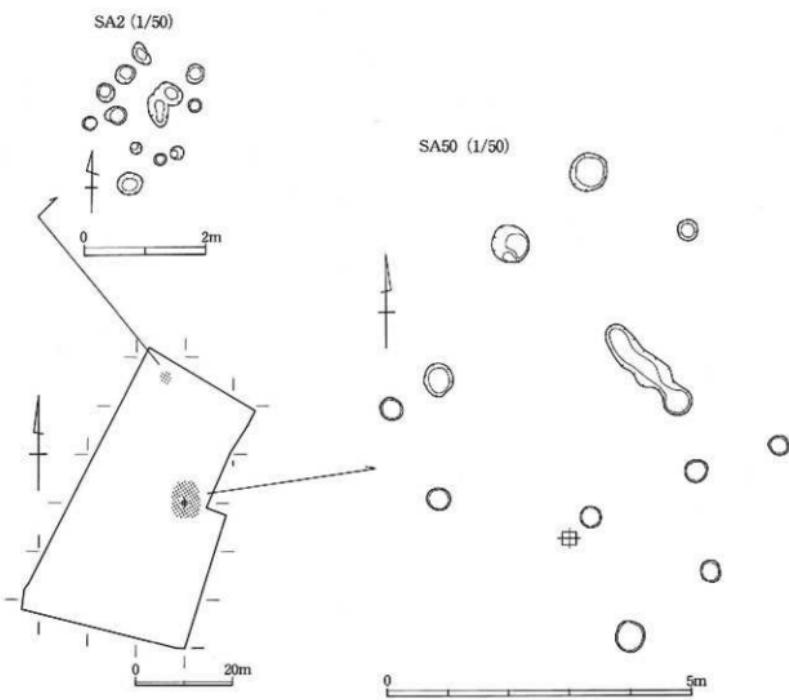


図4-3 C区グリッド平面図（1/1000）



写真4-1 VI層出土遺物（上…石核 下…左からナイフ・細石刃・石鎌・剥片

## 第5節 音明寺第1遺跡（新富町大字新田字音明寺）

### 1 遺跡の立地

音明寺第1遺跡は、標高約100mで、茶臼原段丘面と三財原段丘面の境界の斜面下部に位置する。近くには、湯風呂川が流れしており、水の便に恵まれている。

周辺には、現在調査中の音明寺第2遺跡を始め、東畦原第3遺跡、西畦原第1遺跡、牧内第1遺跡等数多くの遺跡が所在している。

### 2 調査の概要

平成12年9月より調査を開始した。

基本層序は5-2図の通りである。鍵層であるアカホヤ火山灰層（Ⅲ層）、始良・丹沢火山灰層〔A.T〕層（Ⅴ層）、アワオコシスコリア層（XI層）などが確認されている。

本遺跡では、調査区を六つのブロック（A・B・C・D・E・F区）に分けて発掘調査を進めている。

A区では、表土を剥いだ段階で道路状遺構が検出され、B区では、アカホヤ層上面で畝状遺構が検出された。C区では、アカホヤ層上面で道路状遺構が1条確認され、VI層・V層より、チャートや黒曜石の剥片、石鏃、土器片等が出土した。

E区では、アカホヤ層上面で畝状遺構、IV層・V層面で溝状遺構や土坑が検出されている。F区でも、縄文早期面からV層で溝状遺構が検出されている。

#### （1）縄文時代早期

IV層直下、V層上面から5cm～10cm掘り下げたところで遺物の集中が見られ、縄文早期の文化層と捉えられる。遺構として、C区から集石、小土坑が検出された。E・F区から溝状遺構及び土坑が検出されている。



図5-1 周辺地形図（1/4000）

I	表土
II	黒色土層
III	アカホヤ火山灰層
IV	黒褐色土層
V	暗褐色土層
VI	褐色土層 (小林軽石を含む)
VII	褐色土層
VIII	始良・丹沢火山灰層
IX	明褐色土層
X	褐色土層
XI	アワオコシスコリア

図5-2 基本層序

C区の礫群は、主に尾根部で検出されている。遺物に関しては、現在整理作業中であるが、主に土器片（条痕文土器・押型文土器）と石器（石鏃・スクレイパー・剥片）等が出土している。石材については、チャート、姫島産を含む黒曜石の剥片、ホルンフェルス等が現在のところ確認されている。

遺物や遺構の詳細については、今後検討していきたい。

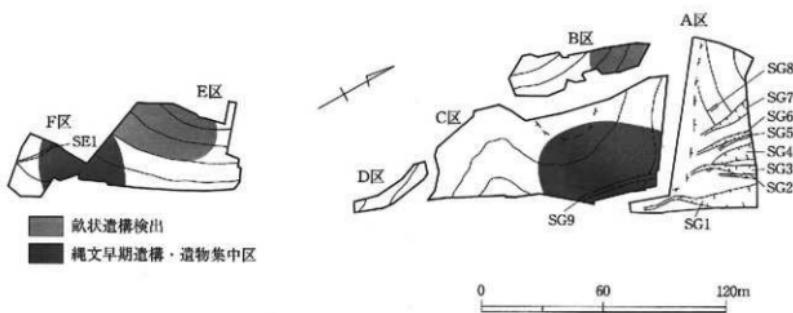


図5-3 縄文早期遺構・遺物分布図 (1/1200)



写真5-1 調査区全景（南から）



写真5-2 調査区全景（北から）

## (2) 中世（道路状遺構）

道路状遺構は、A区で8条、C区で1条確認できた。現況として、A・C区は耕作地として活用されていたため大きな改変が行われている。

道路状遺構は、西から東に延びる尾根を垂直に切り込む形で掘りこまれている。北側から中央にかけては、斜面を削り込み坂道となし、中央から南側にかけて平坦部を削り込み水平な道路を作出している。

検出面では、南側が大きく削平され、道路状遺構は北から南へ行くにつれ次第になくなっていく。現状としてSG1が長さ約30mともっとも残りがよい。道路状遺構はいずれもV字型に掘り込まれ、底部は垂直に切り込み平坦部を作り上げる。

ところで、道路状遺構の特質として、いわゆる「硬化面」の存在を挙げることができる。この硬化面は、断面の観察では、小石や砂を土と混ぜ合わせて固くしまるよう仕上げている。

道路状遺構は、この硬化面の枚数によって補修が行われていたと思われ、少なくとも、1回から5回程度の硬化面の再築がなされていたものと考えられる。そして最下層の硬化面は、底部の垂直面に沿って直径約20cm程度のビットが20cm間隔で並ぶ、いわゆる「波板凹凸面」と呼ばれるビット列を形成している。

時期として、SG4から高原スコリアを含む土層が確認でき、今後はこれを参考として検討していきたい。



写真5-2 波板状凹凸面



写真5-4 A区道路状遺構



写真5-5 C区道路状遺構

(3) その他（時期不明）

時期不明の遺構として、畝状遺構が挙げられる。B区・E区で、いずれもアカホヤ層上面の山腹から検出された。B区の畝状遺構は東西方向に伸び、等高線を垂直に切る形で構築され、E区の畝状遺構も同じく東西方向に伸びるが、こちらは等高線に沿った形で構築される等の違いがみられる。これは、陽光を意識したものと思われる。今後、時期に関しては分析を委託し、検討を加えていきたい。



写真5-6 B区畝状遺構



写真5-7 E区畝状遺構

3まとめ

現在、発掘調査は縄文早期面まで終了している。今後は、縄文草創期、旧石器時代の発掘調査が中心となる。攪乱層からではあるが、旧石器時代の遺物も見つかっているし、確認調査では、AT直上から使用痕剥片も出土している。AT直下層までを目標に発掘調査を進めていく予定である。

## 第6節 音明寺第2遺跡（新富町大字新田字音明寺）

### 1 遺跡の立地

本遺跡は、鬼付女川左岸の三財原台地上にある丘陵の南東斜面（標高約90m）に位置する。調査地周辺は、西側に丘陵からの開析谷が接し、谷は南東方向に下っている。また、この谷下には湧水点を見ることができる。北東には音明寺第1遺跡が立地する。（図6-1）

### 2 調査の概要

本遺跡は、台地から南東方向に伸びる丘陵部を東西及び南方に押し広げた耕作地で、この時の削平により調査区全域にわたってアカホヤ層は存在しない。また、旧地形は南方向に向けて急な斜面となっている。

層序（図6-2）は、小林軽石風成二次堆積層から下は比較的良好な自然堆積が確認できた。鍵層としては、Ⅶ層に始良・丹沢火山灰（AT）層、XI層にアワオコシスコリア層が確認されており、遺物包含層は、IV～V、VII、IX、X層である。

本遺跡では、遺構の性格並びに土層堆積状況を加味し、①～⑤のエリアに区分して調査を進めるにした。ここでは、各エリアごとに調査概要を述べる。（図6-6）



図6-1 周辺地形図

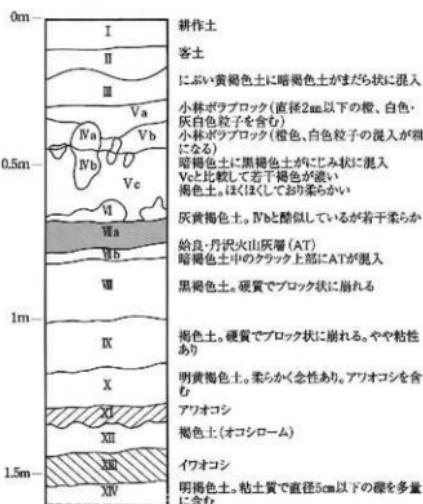


図6-2 基本土層図

#### (1) ①エリア

構築技術の異なる4条の道路状遺構と土坑を一基検出した（図6-3）。中央部S字状に位置する道は、北東方向から南西方向に下っており、全長約27m、下場の高低差約2mを計る。下場には、厚さ4cm～25cmの版築状までの硬化面が存在し、4～5回の構築の変遷を経て利用されたものと思われる。遺物としては、硬化面の中に須恵器片、埋土中に磁器片や剝片等が出土した。

この道の他に、スロープ状に直線的に伸びるものや、ピットを有し階段状に続く道等を確認した。いずれも北東部分が削平により喪失しており、性格並びに構

築時期等は不明だが、谷への往来のために、傾斜を緩やかにするなどの工夫を加えながら利用されたものと考えられる。

## (2)エリア

小林軽石風成二次堆積層から下の層が、削平を受けずに堆積している区域を②エリアとした。このエリアではIV～V層で、5ヶ所のブロックを確認した(図6-3)。これらの石器群では、剥片やチップの他、ナイフ形石器、台形石器、三稜尖頭器、スクレイバー等の石器製品も出土している。また、礫群を1基検出した。VII層下では、IX層で剥片、X層上面で敲石を出土した。

### (3) エリア

小林軽石風成二次堆積層から下の層が、北に向かうにつれて大きく削平の影響を受ける区域を③エリアとした。耕作土を30cm~40cm剥ぐと、②エリアとの境から北に向かってⅣ層、V層、VI層、VII層、VIII層、IX層、X層と基本層序順に各層が表出した。このエリアではⅣ~V層の残存区域からナイフ形石器を含む1ヶ所のブロック、Ⅸ層では剥片・チップを中心とした1ヶ所のブロックと、



写真 6-1 道路状遺構（東から）

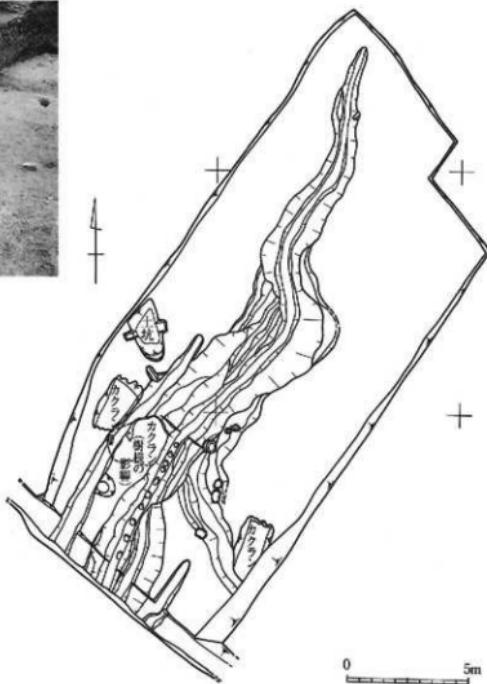


写真 6-2 道路状遺構完掘状況（北東から）

図6-3 音明寺第2遺跡 ①エリア平面図

礫群を4基確認した。Ⅸ層からⅩ層については、現在調査中であるが、これまでに礫器等を出土した。

#### (4)エリア

一つ瀬土地改良事業に伴う農業用水道管の埋め込みと、山芋の栽培による2m以上の天地返しの影響で自然堆積土層が帯状に残存する部分を④エリアとした。ここでは、Ⅳ～V層とⅦ層の2つの文化層から、ナイフ形石器、石核、剥片等が約90点出土した。

#### (5)エリア

丘陵を削平した際に持ち込まれた客土に覆われ、山芋の栽培による天地返しの影響でⅦ層から上層は残存していない部分を⑤エリアとした。旧地形は、東方向に傾斜している。遺物は約3mの深さになる残存Ⅶ層中より黒曜石の剥片等が10点程出土した。



写真6-3 小林ボラを含む褐色土における遺物出土状況（南西から）

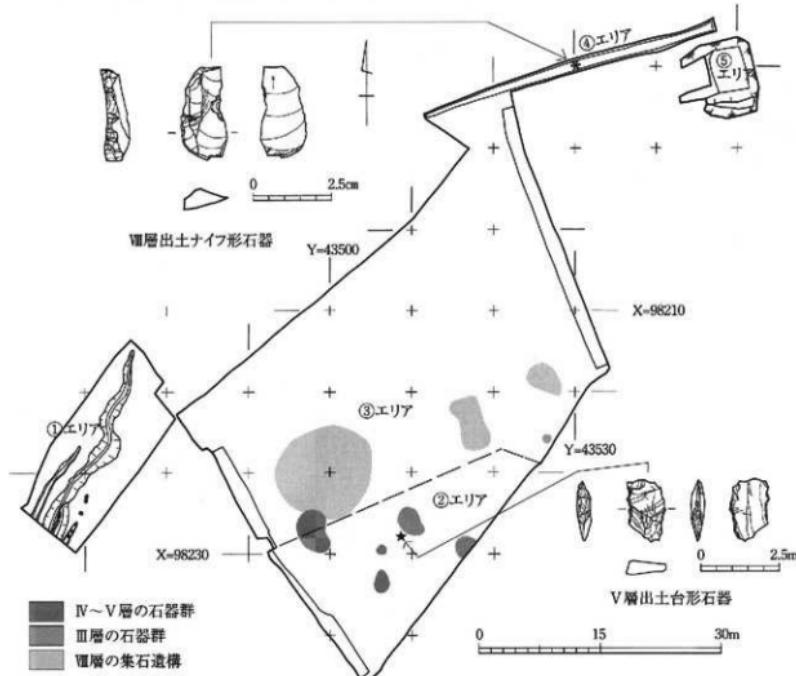




写真 6-4 ④エリア VII層までの遺物出土状況（東から）



写真 6-5 ⑤エリア VII層までの遺物出土状況（南西から）

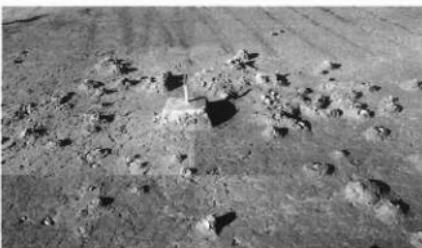


写真 6-6 ③エリア VII層中の礫群（南から）

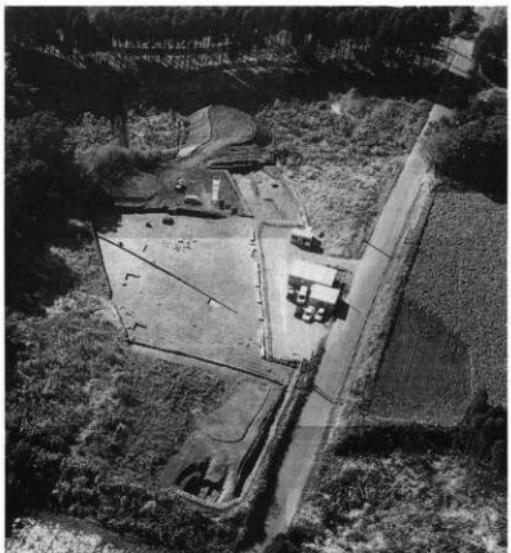


写真 6-7 遺跡遠景（北東から）

### 3まとめ

本遺跡の遺物包含層は、小林ボラを含む褐色土以下で4層確認されている。中でも後期旧石器時代のAT下位の文化層については、本県における調査事例が少なく、その意義は大きい。

また、遺物についてもAT下位のⅤ層でナイフ形石器が出土していることから、ナイフ形石器の編年を作成する上での貴重な資料になると考えられる。今後は自然科学分析結果等を含めて遺構の性格付けを検討していく必要がある。

## 第7節 東畦原第3遺跡（新富町大字新田字大中原）

### 1 遺跡の立地

本遺跡は、新富町北西部を流れる三財原川に向かって緩やかに傾斜する三財原台地上に位置する。調査地は、北側に緩やかに傾斜し、北西側を耕作するために削平、造成した地形に立地する。周辺には、西側に開折谷を挟んで西畦原第1遺跡が所在している。

### 2 調査の概要

本遺跡は、調査対象区の北部の標高約86mをA区、公衆道路を挟んだ東側をC区、西側の標高約83mをB区とした。

本遺跡の基本層序は、右の通り（第7-2図）で、鍵層としてⅢ層にアカホヤ火山灰二次堆積層、VI層に小林軽石を含む褐色土層、VII層に始良・丹沢火山灰（AT）層、IX層にアワオコシスコリア層、X層にイワオコシスコリア層が確認されている。

A区北東付近ではIV層まで開墾による削平を受け、北西側ではVI層まで達している。また、中央付近の一部はVII層まで開墾の削平を受けていた。B区では東方向から西方向に急激な傾斜がみられ、東壁では表土下約40cmよりVI層上面が削平を受け、西壁では約120cmの客土下よりII層以下の層が確認されている。C区ではB区と同様に東方向から西方向に急激な傾斜が見られ、東壁では表土（約50cm）下よりVI層、西壁では造成土（約50cm）下よりII層以下が確認されている。

遺物包含層はIV、V～VI層でそれぞれ確認されている。

#### （1）後期旧石器時代

VI層より、ビット2基（うち1基は焼土を含む）、礫群1基を検出したのみで、他の遺構については確認されていない。遺物については細石刃、細石核、微細剥離のある剥片、二次加工剥片、スクレイパー、ナイフ形石器、角錐状石器等が出土しており、その多くはA区の北東側に分布している。細石刃、細石核の石材は、黒曜石が主である。また、流紋岩を石材とする剥片等が中央付近よりやや南東側より出土している。



図7-1 周辺地形図（1:5000）

I	表土
II	黒色土層
III	アカホヤ火山灰層
IV	黒褐色土層
V	暗褐色土層
VI	褐色土層 (小林軽石含)
VII	始良・丹沢火山灰層
VIII	褐色土層
IX	アワオコシスコリア
X	イワオコシスコリア

図7-2 基本土層柱状図

## (2) 縄文時代早期

IV層より集石遺構1基が確認されている。集石遺構では掘り込みは確認されていないが、焼石が多く見られた。遺物については無文の土器が数点出土しており、石器ではチャート製の石鎌、剥片、石皿等が出土している。

## (3) まとめ

縄文時代早期では土器の出土が少なく、遺構に伴う遺物も確認されておらず、遺跡の密度としては薄いと思われる。旧石器時代についてはV層直下に細石器文化期の文化層が、またⅥ層の上下にも文化層が確認されている。今後十分検討しながら進めていきたい。

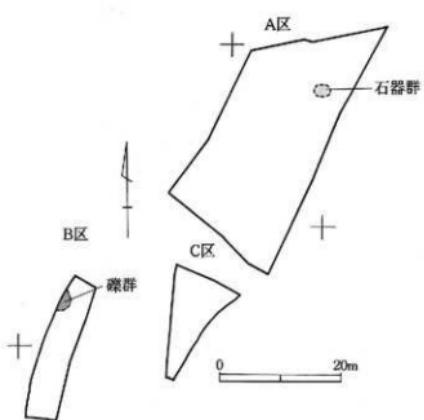


図7-3 遺構分布図



写真7-1 A区調査風景（南から）

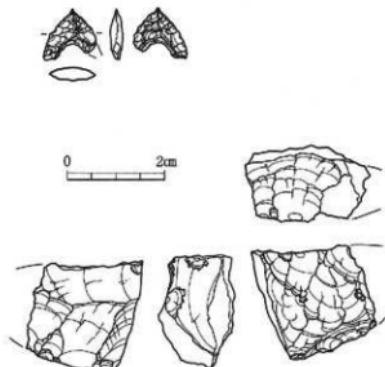


図7-4 遺物実測図 (S=1/1)



写真7-2 B区砾群出土状況（西から）

## 第8節 西畠原第1遺跡（新富町大字新田字西畠原）

### 1 遺跡の立地

西畠原第1遺跡は、一つ瀬川の左岸に広がる三財原面上に立地する。

本遺跡の東側には、小さな開析谷が開けており、トレンチ掘りを行うと水がしみだす。また、調査区東側と南側は耕地整理の際に盛られた客土が堆積している。

本遺跡の近くには、新田原古墳群や弥生時代中期後葉から後期前葉の遺跡である新田原遺跡、畠原型細石核の標識遺跡である西畠原第2遺跡などが立地する。

### 2 調査の概要

本遺跡の基本層序は右記の通りである。

確認調査の結果では、Ⅱa層及びⅡb層から弥生時代中期頃の遺物が出土するとともに、Ⅲ層アカホヤ層上面でピットが検出された。また、今回の調査区の西側の竹林からはⅢ層直下で集石造構が検出された。よって、本遺跡では、Ⅲ層アカホヤ火山灰の上下の2つの文化層での調査が主眼となる。

まず、表土を重機で剥ぎ、その下の層を丁寧に精査を続けたところ、Ⅱa層から多数の土器片と数片の石礫・砥石等の石器が出土した。この段階で、特に遺物の集中する箇所にトレンチを入れるなどして遺構の検出を試みたが、湿気の多い深い黒色土で遺構の埋土との見極めが難しく、残念ながら遺構検出には至らなかった。

さらに、Ⅱb層まで掘り下げる、黒色土が強く残るいくつかのプランや多数のピットが出現し始め、精査を続けた結果、3基の竪穴住居跡と1棟の掘立柱建物跡を検出した。また、Ⅲ層形成時期には、本調査区の北西から南東に向かって浅い谷が走っていたこともわかった。



図8-1 周辺地形図（1/4000）

I	黒褐色土 表土
IIa	黒色土 クロボク
IIb	暗赤褐色土 クロボクとアカホヤ互層
III	アカホヤ火山灰層
IV	黒褐色土 クロニガ
V	黒褐色土 小林軽石を含む
VI	明褐色土
VII	明黄褐色土 (AT)
VIII	暗褐色土
IX	アワオコシ

図8-2 基本層序図

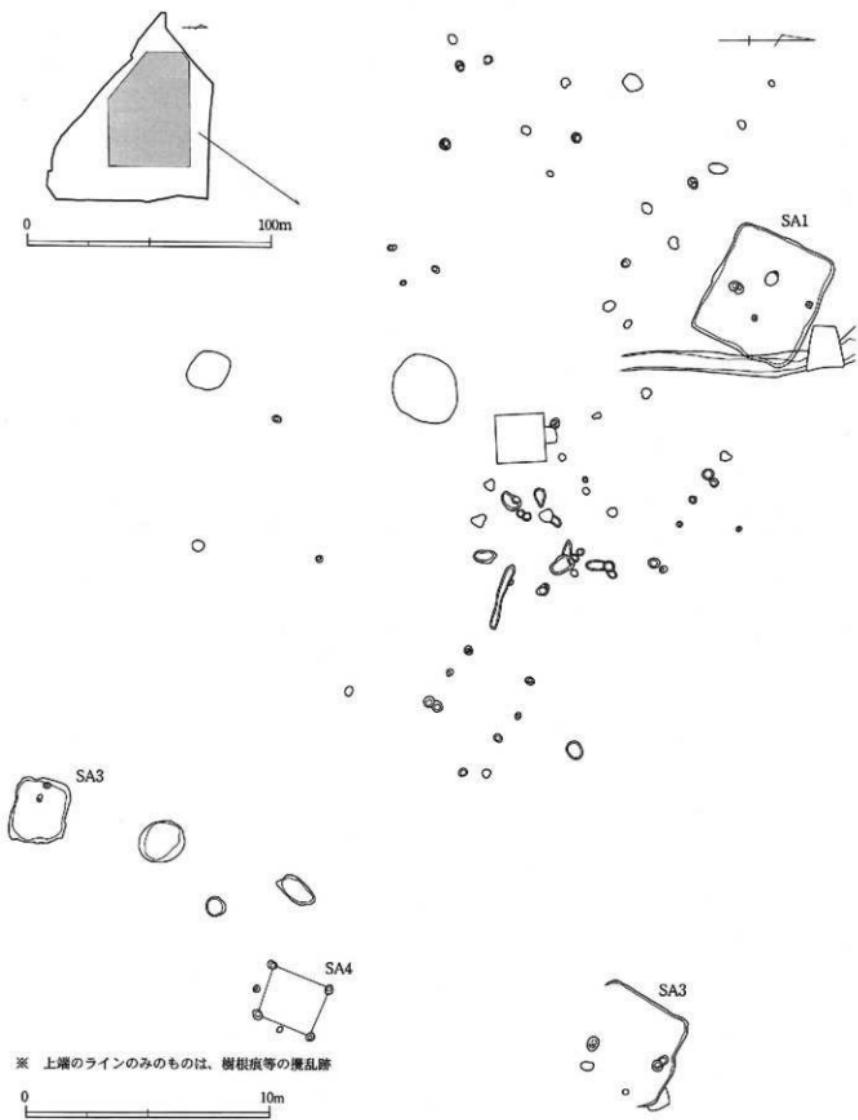


図 8-3 遺構分布図 (1/200)

### 3 遺構及び遺物

#### (1) 遺構

前述の通り、Ⅱb層面で3軒の竪穴住居跡（SA 1～3）と1軒の掘立柱建物跡（SB 4）が検出された。

竪穴住居は、いずれも方形の平面形を呈する。規模は、SA 1が5.0m×4.4m、検出面からの深さが30cm、SA 2が4.2m×3.9m、検出面からの深さが27cm、SA 3が2.7m×2.3m、検出面からの深さが32cmを測る。いずれの竪穴住居跡からも、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけての土器片が出土している。遺構検出面はⅡb層であるが、Ⅱa層あるいはその上位から掘り込まれていた可能性もある。

掘立柱建物（SB 4）は、柱間2.4m～2.2mで4基の柱穴が並ぶ。いずれの柱穴からも小片ながら遺物が出土しており、Ⅱa層出土遺物と同時期のものと思われる。



写真8-1 SA 1検出状況



写真8-2 SA 3検出状況

#### (2) 遺物

遺物の多くはⅡa層中から出土しているが、前述の通り、いずれも弥生時代中期後葉から後期前葉のものと考えられる。

主な遺物としては、土器では、「中溝式」の壺の口縁部や底部及び突帯が巡る胴部、須玖式の壺の口縁部、瀬戸内系の壺の口縁部などが、石器では磨製石鎌や砥石などが出土している。（図8-4）

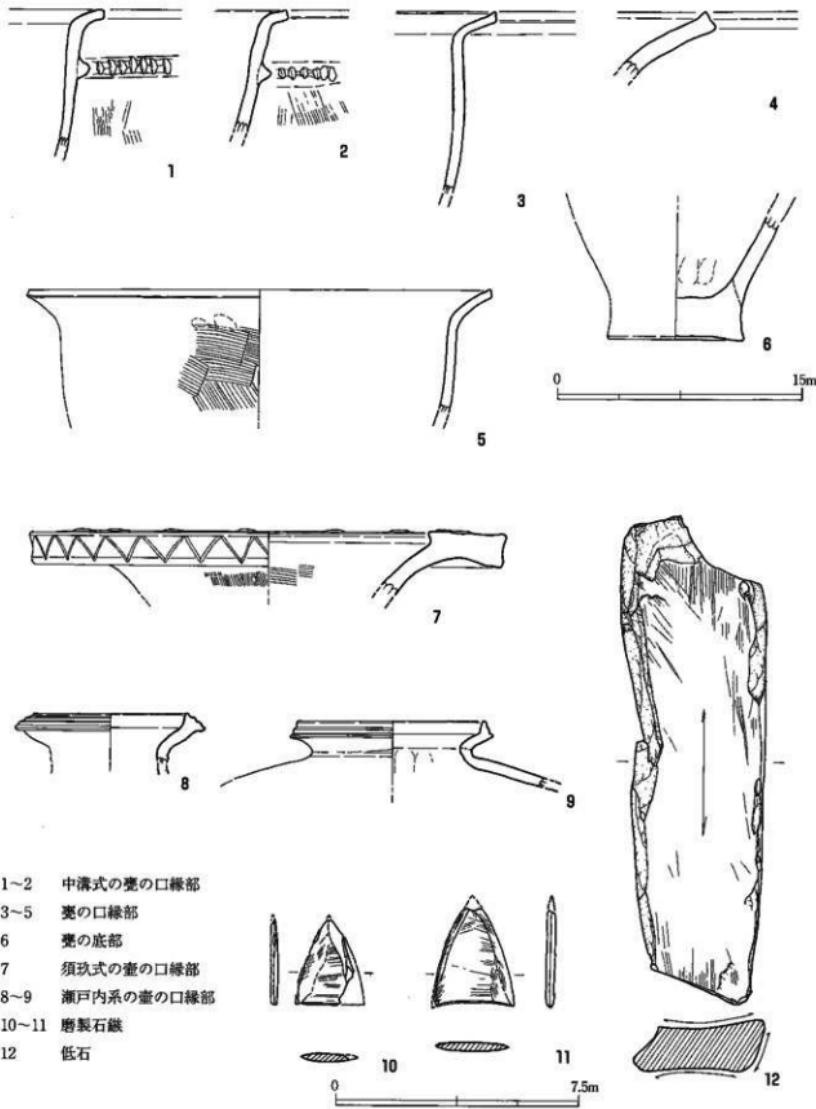


図8-4 主な出土遺物実測図 (1/3 10と11のみ2/3)

## 第9節 藤山第2遺跡 (児湯郡新富町大字新田字藤山)

### 1 遺跡の立地

藤山第2遺跡は、西都市に隣接する新富町西部の大字新田字藤山に所在し、祇園原古墳群が展開する新田原台地の南端（標高25m～40m）に位置する。調査地は、台地を浸食する谷筋に立地し、南側には一つ瀬川に注ぎ込む藤山川が流れている。周辺には、西約500mのところに有峯城跡が、東南約2kmのところに新田原古墳群が所在している。



写真9-1 遺跡全景(東から)

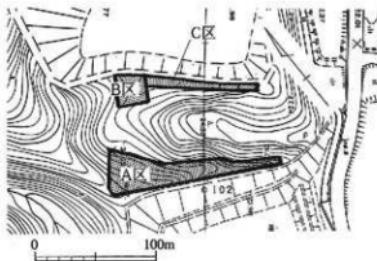


図9-1 周辺地形図(1/2,000)

### 2 調査の概要

確認調査の結果をもとに、調査区の西側の谷斜面をA区とし、東側の谷斜面を2つに分け、それぞれB区、C区として本調査をすすめた。

#### (1) 基本土層

調査地の基本土層は右図のとおりである。鍾層であるアカホヤ火山灰（IV層）は調査区全域で確認できた。また、始良丹沢火山灰（AT）、アワオコシスコリアについてはトレンチによる部分的な確認であるが同様な分布であることが確認された。

#### (2) A区

II層とIII層およびIV層の上面から縄文土器片が検出され、北西部の一角に集中がみられた。時期を特定できる個体は少ないが、縄文前期の轟式と推定される土器片を含む。IVa層上面からは土器片や石器を伴った散疊が2基検出された。V層では北西部で疊群が2群検出された。さらに疊群の下（VI層）から集石造構が2基、南側に1基検出され、3基中2基に敷石が確認された。同じくVI層では梢円押型文土器片や鉢形石鏡もあわせて出土しており、縄文早期に属すると見られる。

旧石器時代については9本のトレンチで確認したが、遺構、遺物とも検出されなかった。

I	表土
II	黒褐色土
III	
IVa	二次堆積アカホヤ
IVb	アカホヤ火山灰層
V	明褐色土I
VI	明褐色土II
VII	明褐色土III

図9-2 基本土層図

### (3) B区

斜面に沿った形で溝状遺構1条を検出した。遺物が検出されず、遺構の時代・性格とも現段階では不明である。

### (4) C区

地形、土層及び遺構、遺物の確認のため、調査区境界付近にトレンチを設定して調査したが、遺構・遺物とも検出されなかったので、調査の対象から除外した。

## 3まとめ

調査はすでに終了しており、今後は出土した遺物の整理を通してより正確な時期比定を行いたい。

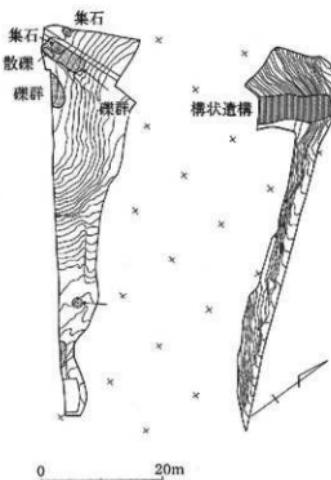


図9-3 遺構分布図 (1/800)

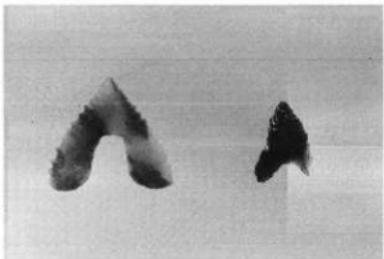


写真9-2 A区出土遺物（石礫）

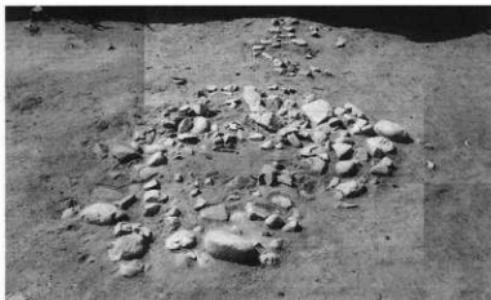


写真9-3 A区集石遺構出土状況（東から）

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第49集

平成12年度

**東九州自動車道(都農～西都間)関係  
埋蔵文化財発掘調査概要報告書 I**

発行年月日 平成13年(2001)3月30日

編集・発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019  
0985-36-1172

印 刷 梶印刷センタークロダ  
880-0021 宮崎市大橋1丁目175  
0985-24-4351